



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.10

2018

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (7)

雪山童子の求道

岡本英夫

羅刹は答えます。

「生滅 滅し已 (おわ) り
寂滅を楽 (らく) と為 (な) す」

そして、続けて言おう。童子よ、汝は偈のすべてを聞くことができ心満たされたことであろう。もし諸々の衆生を利益 (1) しようと願うならば、今、汝の身を我に施せ。」

羅刹が説いた後の半偈が「生滅滅已 寂滅為楽 (しょうめつめつい じゃくめついらく)」です。前の半偈で言った諸行無常が生滅する、その全体が滅し已れば、已るというのは完全に滅してしまえば、寂滅の世界、寂滅涅槃 (2) の世界を楽と為すと。寂滅涅槃の世界こそ真の楽であり、人間が真にいきいきと生きることのできる世界の源である。即ちこのあとの半偈が仏の世界を表しているわけです。この半偈が出てこないとな前の半偈だけではどのように生きていいかが分からないのです。

そして羅刹は約束どおりその身を差し出せと迫ります。

それを聞いて童子は考えます。ここに、真実の言葉を求め、生きていこうとする者の姿が説かれます。

「童子は羅刹の言葉の意味するところを深く考えた。そして辺りの石という石、壁という壁、樹という樹、道という道すべてにこの偈を書写し、死後その身が露現することを恐れて身の衣装をかけ、高樹に上った。」

その約束はもちろん果たさなければいけません。けれどももし今、自分がこの身を羅刹に捧げて食われて死んでしまえば、せつかく自分が聞くことができた真実のことばは、誰も知る者がいないようになってしまう。これははなはだ残念だ。そこで、羅刹に



木のもとのお話(10)

浄土真宗では極端な禁欲や肉体による苦行は強いられることはありません。そう聞くと、それではなんでもしていいのかと思うかも知れません。しかしお釈迦様のお教えを勉強し、教えによって生きようとすれば、何をしてもいいか、いけないかということは自ずと分かってくるのです。教えによって、本当の自分が見えてくるのです。教えの中にある真実が、私の不実さを照らして、照らし破っていくのです。

注1 利益 (りやく) 仏法によって得られる恩恵。救い。

注2 寂滅涅槃 (じゃくめつねはん) 世界の根源である真実そのもの。今を生きる私たちを最も根源から支えるもの

注3 三世 (さんぜ) 過去、現在、未来のこと

注4 諸仏 (しょぶつ) 仏法の道を歩み、その真実であることを証明している人

身を投げる前に、石や壁、樹、道のすべてに、その真実のことばを彫りつけるわけです。これによって、地上に初めて明らかになった真実のことばがどこまでも伝わってゆくと。もし自分がそれをせずに死んでしまえば、真実のことばは今ここでとどまり、永遠に失われてゆくのだと。

初めにありましたが、地上に、ある童子が、自分の身を貪ることがなく、人々の救いを考えているということだが本当かと帝釈天は疑問に思った。それは本当だったのですね。人々に真実の言葉を残そう、伝えてゆこうとする。その上で自分の身を投げる。自分の身を投げるのも、そうしなければこの言葉を得ることができないわけですから。童子は本当に人々の為に生きていくということが、このことで証明されるわけです。真実のことばは、真実の教えというものは、決して自分一人のものではない。次なる人に伝えてゆくということがいかに大事なことであるかということです。

木に登って、そこから、下で口を開けて待っている羅刹めがけて飛び込んでゆくわけですが、木に登ってゆく途中に木の神が童子に問うのです。

「よき友よ、何をなさろうとするのか。」

童子は、

「身を捨てて偈に報いようとするのです。」と。

すると木の神は、

「その偈はどんな利益があるのか。」

それに対して童子は、

「この偈は三世（3）の諸仏（4）の説かれる真実の法なのです。私はこの法のために身命を棄捨するのです。名聞（みょうもん）.利養（りよう）のために、あるいは財産や権力の為に、さらには天人の樂を得るためにするものではありません。一切衆生の利益を願うためにこの身を捨てるのです。」

「名聞」は名利心、自分個人が評判よく言われるのを求める心です。「利養」は損得を考えて、自分が個人的に得をしようと思う心です。その名聞、利養のためにしているではありません。あるいは、財産や権力、お金を得るためにしているではありません。この名聞、利養、あるいは、財産、権力というのが、人間的な思いの中で一番欲しいものなのです。

もし世間の中で勝った負けた、上だ下だ、優越だ劣等だという、そのような中で翻弄されるだけの人生を送るとすれば、名聞、利養、権力、財産で一喜一憂する人生になるでしょう。しかし童子は、そのようなものを得るために求めているのではない。このように木の神に告げるわけです。そしていよいよ身を羅刹の口に向けて投じます。

（続く）

